

# 太阿記

## 沢庵禪師

蓋兵法者、不爭勝負、不掬強弱、不出一步、不退一步、敵不見我、我不見敵、徹天地未分陰陽不到處、直須得功。

夫通達人者、不用刀殺人、用刀活人、要殺即殺、要活即活、殺殺三昧、活活三昧也、不見是非、而能見是非、不作分別、而能作分別、踏水如地、踏地如水、若得此自由、尽大地人奈何他、悉絕同侶。

欲得這箇麼、行住坐臥、語裡默裡、茶裡飯裡、工夫不怠、急着眼窮去窮來、直須見、月積年久而如、自然暗裡得燈相似、得無師智、免無作妙用、正與麼時、只不出尋常之中、而超出尋常外、名之曰太阿。

此太阿利劍、人々具足、箇々円成、明之者、天魔怕之、昧之者、外道欺之、或上手与上手、鋒銳相交、不決勝負者、世尊拈華、迦葉微笑、如又拳一明三、目機鋒兩、是尋常之靈利也、若夫此事了畢人、於一未拳、三未明以前、早截作三段、況顔々相對乎。如是人、終不露鋒銳、其疾也、電光無通、其短、急嵐無及、無這般手段、終拈却着、便傷鋒犯手、不足為好手、其以情識卜度、無言語所可伝、無法樣所可習、教外別伝法是也。

大用現前、不存規則、順行逆行、天無測、是什麼道理、古人云、家無白沢園、無如是妖怪、若人鍊得至這箇道理、一劍平天下、學之者莫輕忽。

「蓋シ兵法者ハ、勝負ヲ争ワズ、強弱ニ拘ラズ、一步ヲ出デズ、一步ヲ退カズ、敵、我ヲ見ズ、我、敵ヲ見ズ、天地未分、陰陽不到ノ処ニ徹シテ、直チニ功ヲ得ベシ。」

「蓋し」とは、知らねどもと云ふ義なり。全体此の字はふたと訓む字なり。譬へば重箱に蓋を着せて置けば、中には何を入れたるやら知らねども、推量すれば十が六七は当たるものなり。ここも其の如く知らねども、斯くあらむと落ち着けずに云ふなり。仮令しかと知りたることにても、卑下して心得だてに云はぬが是れ文の作法なり。

「兵法者」とは、字面の如し。

「勝負ヲ争ワズ、強弱ニ拘ラズ」とは、勝ち負けをも争はず、強き弱きの働きにも拘らずとなり。「一步ヲ出デズ、一步ヲ退カズ」とは、一足も踏み出さず、一步も退かず、坐ながら勝ちを制することなり。

「敵、我ヲ見ズ」とは、我は真我の我なり。人我の我にあらず。人我の我は、人能く之を見れども、真我の我は人之を見ること稀なり。故に「敵我ヲ見ズ」と云ふなり。

「我敵ヲ見ズ」とは、我に人我の我見なき故に、敵の人我の兵法を見ざるなり。「敵ヲ見ズ」と云へばとて、目前の敵を見ぬに非ず。見て見む所是れ妙なり。

さて真我の我とは、天地未分曰前、父母未生曰前の我なり。此の我は、我にも鳥獸畜類草木一切の物にある我なり。即ち仏性と云ふものは是れなり。故に此の我は、影もなく、形もなく、生もな

く、死もなき我なり。今日の肉眼を以て見る我にあらず。唯悟り得たる人のみ能く之を見るなり。其の見たる人を見性成仏の人と云ふ。昔、世尊雪山に入り給ひて、六年の艱苦を経て悟り給ふ。是れ真我の開悟なり。常の凡夫信力なくして、三年五年に知ること非ず。学道の人、十年二十年、十二時中、そつとも怠らず、大信力を興し、知識に参して、辛勞苦勞を顧みず、子を失いたる親の如く、立てたる志少しも退かず、深く思ひ、切に尋ねて、終に仏見法見も尽き果てたる所に到りて、自然に之を見ることを得るなり。

「天地未分、陰陽不到ノ処ニ撒シテ、直チニ功ヲ得ベシ」とは、天も地も未だ分かれず、陰も陽も未だ到らざる巳前の処に眼を着けて、知見解会をなさず、能くまっすぐに見よ。然らば大功を得る時節あらんとなり。

「夫レ通達ノ人者、刀ヲ用イテ人ヲ殺サズ、刀ヲ用イテ人ヲ活カス。殺サント要セバ即チ殺シ、活カサント要セバ即チ活カス。殺殺三昧、活活三昧ナリ。是非ヲ見ズシテ能ク是非ヲ見、分別ヲ作サズシテ能ク分別ヲ作ス。水ヲ踏ムコト地ノ如ク、地ヲ踏ムコト水ノ如シ。若シ此ノ自由ヲ得バ、尽大地ノ人、他ヲ奈何トモセズ、悉ク同侶ヲ絶ス。」

「刀ヲ用イテ人ヲ殺サズ」とは、刀を用ひて人を斬ることをせねども、人皆此理に逢ひては、おのれとすくみて、死漠となるが故に、人を殺すの必用なきなり。

「刀ヲ用イテ人ヲ活カス」とは、刀を用ひて人をあしらひつつ、敵の働くに任せて見物せんといふが儘なり。

「殺サント要セバ即チ殺シ、活カサント要セバ即チ活カス。殺殺三昧、活活三昧ナリ」とは、活かさうとも、殺さうとも自由三昧なりとなり。

「是非ヲ見ズシテ能ク是非ヲ見、分別ヲ作サズシテ能ク分別ヲ作ス」とは、兵法の上には非を見ずして能く是非を見、分別を作さずして能く分別を作すとなり。譬へば一面の鏡を開き置けば、何物にても前に在る物は、それ の形うつりて、それ に見ゆるなり。然れども其の鏡は無心なる故に、それ の形は、きっかとうつせども、それは是れ、是れはそれと、分別する心はなきなり。兵法を使ふ人も、一心の鏡開くときは、是非分別の心なければども、心の鏡明かなるによりて、是非分別は見えずして、能く見ゆるなり。

「水ヲ踏ムコト地ノ如ク、地ヲ踏ムコト水ノ如シ」とは、此の意は、人々の本源を悟りたる人ならでは、知るべからず。愚者は「水ヲ踏ムコト地ノ如ク」ならば、地を行きても陥らむ。「地ヲ踏ムコト水ノ如ク」ならば、水を踏みても歩かれんと思はむ。されば、此れの事は、地水ともに忘れたる人にして、始めて此の道理に到るべし。

「若シ此ノ自由ヲ得バ、尽大地ノ人、他ヲ奈何トモセズ」とは、斯く自由を得たる兵法家は、尽くの大地の人が寄りて謀るとも、何とも為すやう有るまじとなり。

「悉ク同侶ヲ絶ス」とは、世界に並ぶものないと云ふ事にて、謂ゆる天上天下唯我独尊なり。

「這箇ヲ得ント欲スレバ、行住坐臥、語裡默裡、茶裡飯裡、工夫ヲ怠ラズ、急二眼ヲ着ケテ、

竊メ去リ、竊メ來タツテ、直チニ見ルベシ。月積ミ年久シユウシテ、自然暗裡ニ燈ヲ得ルガ如キニ相似タリ。無師ノ智ヲ得、無作ノ妙用ヲ發ス。正与魔ノ時、只、尋常ノ中ヲ出テズ。而モ尋常ノ外ニ超出ス。之ヲ名ヅケテ太阿ト曰ウ。」

「這箇ヲ得ント欲スレバ」とは、這箇は右を指す言葉にて、右件の旨を得んと思ふならばと云ふ義なり。

「行住坐臥」とは、行くと住ると坐ると臥すとの四つにて、之を四威儀と云ふ。人々の上に皆ある事なり。

「語裡默裡」とは、物語のうちも、無言のうちも、と云ふ事。

「茶裡飯裡」とは、茶を飲むうちも、飯を食ふうちもとなり。

「工夫ヲ怠ラズ、急ニ眼ヲ着ケテ、竊メ去リ、竊メ來タツテ、直チニ見ルベシ」とは、工夫を油断して怠ることなく、恒に自己に立返り、急に眼を着けて其の理を窺めつつ、只まっすぐに、是は是非は非にして、それぞれの上にこの理を看よとなり。

「月積ミ年久シユウシテ、自然暗裡ニ燈ヲ得ルガ如キニ相似タリ」とは、斯くの如く工夫を能くしつつ、月を積み年を累ねて進み行くほどに、彼の妙理を自得すること、恰も闇の夜に忽ち燈の光に逢ふが如くに相似たらばとなり。

「無師ノ智ヲ得」とは、師匠も伝へぬ根本智を得ること。

「無作ノ妙用ヲ發ス」とは、凡夫の所作は一切意識より出るが故に、総て有作の働きにて苦しむ事のみなるを、此の無作の働きは、根本智より發するが故に、只々自然にして安樂なり。是の故に

妙用と云ふなり。

「正与塵ノ時」とは、正に個様の時に云ふことにて、即ち「無師ノ智ヲ得、無作ノ妙用ヲ発ス」其の時なり。

「只、尋常ノ中ヲ出デズ。而モ尋常ノ外ニ超出ス」とは、そも此の無作の妙用は、別段なる処に発するに非ず。只々平生一切の仕業が、総て無作になり切るが故に、決して尋常一様の中を出て離るゝに非ず。さればとて、平々の凡夫が、尋常一様の有作の働きとは、全く切れ替りたるものなるが故に、「尋常ノ中ヲ出デズ。而モ尋常ノ外ニ超出ス」なり。

「之ヲ名ヅケテ太阿ト曰ウ。」とは、太阿は天下に比類なき名劍の名なり。是の名劍は、金鉄の剛きより、玉石の堅きまで、自由に研れて天下に刃障になる物なし。彼の無作の妙用を得たる者は、三軍の元帥も百万の強敵も、是れが手に対ふるもの無きこと、猶彼の名劍の刃に障るものなきと一般なるが故に、此の妙用の力を太阿の劍とは名づくるなり。

「此ノ太阿ノ利劍ハ、人々ニ具足シ、箇々ニ円成ス。之ヲ明ラメル者、天魔モ之ヲ怕レ、之ニ味キ者、外道モ之ヲ欺ク。或イハ上手、上手ト与ニ鋒銃。相交エ、勝負ヲ決セザルハ、世尊拈華、迦葉微笑、又、一ヲ挙ゲテ三ヲ明ラカニスル如シ。目機鉄両、是レ尋常之靈利ナリ。若シ夫レ、

此ノ事、了畢ノ人、一ヲ未ダ挙ゲズ、三ヲ未ダ明ラメザル以前ニ於イテ、早、截ッテ三段ト作ス。

況ヤ 顔々 相對スルオヤ。」

「此の太阿の利劍は、人々に具足し、箇々に円成す」とは、天下に刃障になる程の物なしと云ふ。

太阿の名劍は、他人の許に在るに非ず。人々孰れにも具足し、箇々少しも欠目なく、円満に成就してあるぞとなり。是れ即ち心の事なり。是の心は、生の時に生ずるに非ず。死の時に死するに非ざるが故に、本来の面目と云ふ。天も之を覆ふこと能はず。地も之を載すること能はず。火も之を焼くこと能はず。水も之を濕すこと能はず。風も之を透すこと能はざるが故に、天下に此の刃障になる物はなきなり。

「之ヲ明ラメル者、天魔モ之ヲ怕レ、之二味キ者、外道モ之ヲ欺ク」とは、是の本来の面目を悟り明らむる者は、宇宙の間に遠り覆ふものなき程に、天魔の神通力を施すべき術なく、却って逆さまに己れが腹の底まで見透さるゝ故に、此の人を怕れ懼りて、寄り付くことゝはならぬなり。之に反して、是の本来の面目を味まし迷う者は、種々の妄念妄想を蓄ふる程に、其の妄念妄想に付け入りて、外道も容易に之を欺き瞞ますことを得るなり。

「或イハ上手、上手ト与ニ鋒銚相交工、勝負ヲ決セザルハ」とは、若し互いに本来の面目を悟りし者同志出会して、双方共に太阿の劍を抜き放し、鋒と銚お付け合ひて、勝負の決することの出来ぬ時には、何となるぞと云ふに、其の世尊と迦葉との出会の如しとなり。

「世尊拈華、迦葉微笑」とは、世尊末後に靈山会上にて、一枝の金婆羅華を拈じて、八万の大衆に示し給ふに、みな黙然として居たり。只迦葉一人、につこと笑ひ給ふ。其の時世尊、迦葉の悟を開き給ふことを知り給ひて、吾が不立文字、教外別伝の正法は、汝に附屬す。と印証し給ひしが如しとなり。さて、それより此の正法は、西天には二十八代達磨まで伝はり、唐土には、達磨より六代伝はりて、六祖の大鑑禪師に至る。此の禪師は、肉身の菩薩にておはしければ、それ

よりいよいよ唐土にも仏法盛んにして、枝葉はびこり、五家七宗出興して、乃至虚堂より以來、吾朝の大応大燈より、今に至まで血脈不断なり。さる程に、拈華微笑の法は、中々着地に至り難き処なり。容易に推量して知ることに非ず。諸仏も氣を呑み声を飲む所なり。されば此の義理は、言ふべき様なけれども、強て譬へて言はゞ、一器の水を一器に移して、水と水とが合して分ちなき如く、世尊と迦葉と眼一般の処なり。甲乙は更になし。さればいかなる兵法家にも、此拈華微笑の旨を得たる者は、十万人中に一人も無きことなれども、若し最大乗の人ありて、知らむと要せば、更に參ぜよ三十年。若し過らば、唯兵法に達せざるのみにあらず、地獄に入ること箭を射るが如し。怕るべし。

「又、一ヲ挙ゲテ三ヲ明ラカニスル」とは、一を挙げて見すれば、直ちに三を明らむること。

「目機銖兩」とは、目機は目裡の機にて、目分量の事、銖とは目方分量のこと。銖とは目方十糸なり。兩とは十銖を分として、十分を兩とするなり。されば、金銀は、何程あるとも、目分量にて之を量るに、一銖一兩の違ひなきを云ふ。言ふところは、利根靈利の人なり。

「是レ尋常之靈利ナリ」とは、個ほとに靈利の人にては、其は尋常多き利根にて、是れ奇特に非ざるとなり。

「若シ夫レ、此ノ事、了畢ノ人、一ヲ未ダ挙ゲズ、三ヲ未ダ明ラメザル以前ニ於イテ、早、截ツテ三段ト作ス」とは、仏法の大事因縁を悟り畢れる人は、一も未だ挙げず、三も未だ明らめず、何とも角とも兆の現はれざる以前に於いて、早く截て三段となし置くほどに、此の人に逢はば、如何にてもなるまじとなり。

「況ヤ顔々相對スルオヤ」とは、此の如く早業の妙を得て居る人が、他人と顔を合するとき、余りに截り易くて、向ふの人は、首の落ちしも知らぬ程の手際なるぞとなり。

「是ノ如キノ人、終ニ鋒銃ヲ露ワサズ、其ノ疾也、電光モ通ズル無ク、其ノ短也、急風モ及ブ無シ。這般ノ手段無ク、終ニ拈却着シ、擬却着スレバ、便チ鋒ヲ傷ツケ手ヲ犯シ、好手タルニ足ラズ。情識ヲ以テト度スル莫シ。言語ノ伝ウベキ所無ク、法様ノ習ウベキ所無シ。教外別伝ノ法、是レ也。」

「是ノ如キノ人、終ニ鋒銃ヲ露ワサズ」とは、個様の名人は、初めより太刀の鋒は見せぬなり。「其ノ疾也、電光モ通ズル無ク、其ノ短也、急風モ及ブ無シ」とは其の早きこと今見えしと思へば、忽ち消ゆる電光も、其の手の中を通すこと能はず。其の短きことは、沙石を吹き飛ばす嵐も及ぶこと能はずとなり。

「這般ノ手段無ク、終ニ拈却着シ擬却着スレバ」とは、これつらの手際なくして、そつとなりとも、太刀を挙ぐる処に着し、そつとなりとも、心にあてがふ処に着したらばとなり。

「便チ鋒ヲ傷ツケ手ヲ犯シ、好手タルニ足ラズ」とは、必ず太刀の鋒をぶち折りたり、おのが手を截りたりして、決して上手とは言はれまじとなり。

「情識ヲ以テト度スル莫シ」情識は人情中の識分別なり。ト度はトひ度るなり。言ふところは、何程情識を以てトひ度りて見ても、少しも役に立たぬ事なり。故にト度の分別を離れて看よとなり。

「言語ノ伝ウベキ所無ク、法様ノ習ウベキ所無シ」とは、此の真実の兵法は、言辞にて語り伝ふべき様もなく、又法様とて個様に構へて何処を打てよなどと教へ習す様もなしとなり。

「教外別伝ノ法、是レ也」とは、其の如く言辭にても伝へられず、仕方にて教へられぬ業なるが故に、教外別伝の法と云ふなり。教外別伝とは、師の教への外に、別に己が自悟自得せねばならぬ法なるぞとなり。

「大用現前。規則ヲ存セス。順行、逆行。天モ測ル無シ。是レ什麼ノ道理ゾ。古人云ク、家ニ白沢ノ図無ク、是ノ如キ妖怪無シ。若シ人、鍊得シテ這箇ノ道理ニ至ラバ、一劍、天下ヲ平ラグ。之ヲ学ブ者、輕忽スルコト莫レ。」

「大用現前。規則ヲ存セス」とは、かの別伝の法の大用が、目前に現し来れば、自由自在にして、規則を存せぬなり。併し此の大用は、此の十方世界何の処にも行き互りて、兎の毛の先程も、外れたる所なき故に、大用と云ふなり。軌則とは法度法則を云ふ。斯かる物の鑄型の如き法度法則は、大用現前の上には存在せずとなり。

「順行、逆行天モ測ル無シ」とは、此の大用現前の人、順に行かむとも、逆に行くかんとも、自由にして確なし。茲をば天も測り知ることとはならぬとなり。

「是レ什麼ノ道理ゾ」とは、是れはいかなる道理ぞと人に向ひて拶して云ふなり。

「古人云ク、家ニ白沢ノ図無ク、是ノ如キ妖怪無シ」とは、前の拶しの答なり。其の白沢とは、身は牛に似、首は人に似て、何とも知らぬ活物なり。此の物、或は夢を食ひ、或は殃を食ふとて、唐土には其の図を糸がきて、門に押し付け、又は家の柱に張り付けるなり。されば、白沢の図を

押すことは、家の殃わざわいを避けむが為の仕方なり。然れども、家に本より妖怪なき人は、白沢の図を  
ゑがきて押さむと思ふ心もなきなり。言うふところは、順行逆行ともに、用ひ得たる者は天だに、  
も其の心中を測ることならぬからに、一切の苦楽を飛び抜けて、身にも家にも殃なき故、白沢の  
図を好む心もなく、其の境界は、さっぱりと美事なるものぞとなり。

「若し人、鍊得シテ道箇ノ道理ニ至ラバ、一劍、天下ヲ平ラグ」とは、若しそれ斯くの如くんに  
修行して、精金を千鍛百鍊し尽くして、追取刀に到り得たる解脱の人ならば、漢の高祖が、劍一  
つを以て天下を平けられし如きことあらんとなり。

「之ヲ学ブ者、輕忽スルコト莫レ」とは、此の劍の妙理を学する者は、たやすく觥相きょうさうなる觀念を  
することなく、高く精彩を励まし、切に工夫を着けて片時も怠ること勿れとなり。